

V85a 神岡低温レーザー干渉計 CLIO の現状

大橋正健 (東京大学宇宙線研究所)、TAMA-CLIO グループ

重力波次期計画は、神岡地下に基線長 3km の低温レーザー干渉計を建設する LCGT 計画であり、その実現に向けて努力が続けられている。このような地上の観測装置が有力な重力波源として想定しているのは、連星中性子星の合体イベントである。合体時にはチャープ信号という特徴的な重力波形を発生し、ブラックホールを形成するはずである。米国の LIGO は乙女座銀河団の距離で起きるチャープ重力波を捕らえる感度を持つが、まだ重力波を検出してはならず、さらに一桁感度をあげる（イベント数が千倍になる）べく、Advanced LIGO への改造を開始した。LCGT の目標感度は Advanced LIGO とほぼ同じであり、年間数イベント以上を検出できると予測している。現在は、その前段階として、到達距離を 2 倍に伸ばすための改良作業が行われている。そのため、LCGT 建設に一日でも早く着手することが重要になってきた。

その LCGT 計画の準備研究として、神岡地下スーパーカミオカンデの近くにサファイアミラーを装着した基線長 100m の低温レーザー干渉計 CLIO が稼働中である。ここでは、ミラー冷却能力や低温での防振特性に関する技術的な検証など、LCGT に向けた実証的研究を国立天文台 TAMA グループと協力して進めている。

本講演では、CLIO の現状について報告する。